

葉桜照月

小鳥の声も聞こえない静かな朝である。

煉瓦積み二階建ての建築物、その二階で窓から外を眺めていた。普段は威勢のいい小鳥が眠気を晴らしてくれるのだが、今朝はいつもとは違うようだ。

ここは大陸のはずれ、オークの勢力圏の隅っこにある街だ。十数年前にオークの蹂躪を許したこの街は、そうであるにも関わらず、ある事情を除いては至って平穏な日々を送っている。オークが跋扈するでもなく、ひどい重税に苦しむわけでもない。あくまで支配層が貴族から魔族に変わったただけだ。

ただ変わったのは、その「ある事情」の導入のみである。そして私は、ここまで考えて初めて今日が「ある事情の日」であること、そしてそれこそが静かな朝を迎えた理由であったことを思い出した。

「市場」は早朝に始まるから、そろそろ奴らが来てもおかしくない時間帯だ。：ほら、見えてきた。静寂が、ゆつくりと崩れていく。

なんのことはない。

奴隷市でオークに買われたどこかの娘たちが、あらゆる姿で連れ回されているだけである。

もともと奴隷制度は人間の支配の時代からあった。ただそれは貴族の道楽で、一般市民が関わりうるものではなかった。侵略してきたオークが一般市民にも解放したのである。理由は当然見せしめだ。月に一度、一般にも開かれた奴隷市で、オークが娘を買っていく。それを市民は見ていることしか出来ない。もちろん市民も奴隷を買えるが、オークとの競合は許されない。

そうして買われたかわいそうな娘たちは、更なる見せ

しめとして服を剥かれて街を引き回される。オークが人間をいいようにできる、その証明だ。それでも人間たちはそれを見ても反抗の気を起こさない。男なんかは美女が引き回されるのを好き好んで見物に行くくらいだ。

所詮、人間はそんなものだ。

周りに変化に流されて、自分からは変わろうとしない。誰かが変えてくれるのを、大口開けて待っている。そんなものだ……。

胸糞悪くなって窓に背を向ける。台所に立って、茶を入れるため、水を火にかけ始める。慣れた動作だ。

ふと、左手の甲に目が行く。焼き印された五桁の数字。他でもない、奴隷市で売られた証だ。

*

……六年前。

私もまた、奴隷市に出された没落貴族一家の少女だった。人間か、オークか。売られた先がどうだろうと、私に明るい未来など無いことだけははっきりしていた（それでも、私を買ったのが人間だと知ったときには安堵した）。

私を買ったのは眼鏡の中肉中背、冴えない僂男だった。奴隷市で女を買うという趣味の悪い男は、なんとなく脂ぎって禿げ上がったオジサンのような先入観があったから、この点は少し驚いた。だけど、驚いたのはそれだけではない。彼の第一声である。

「君さ、買ってきて言うのもナンだけど、僕の妻になってくれないかな？」

……湯が沸いた。

*

茶葉を濾して、カップに注ぐ。パンと共に盆にのせ、「私を買った主人」にして「夫」の居室に向かう。

彼の居室のドアをノックすると、ただ一言、「空いてる」とだけ帰ってくる。これもまた毎日のやりとりだ。

ドアを開けると、薄暗い部屋に本がうずたかく林立している。床が抜けて下の住人を押し殺しそうなほどだ。古い本の放つ独特なニオイもまた感じられる。私はこのニオイをあまり好きではないのだが、もはや慣れたし、そもそも私は奴隷だ。文句を言える立場ではない。

*

私を買ったその男の第一声は求婚だった。

いくら人間が買ってくれたとはいえ、奴隷の行く末はあらゆる欲のはけ口と相場が決まっている。だから最初は何かの婉曲かと疑った。だが、どうやらそうでもないらしかった。彼は本気だったのである。

市場から家に帰ると、その家は見渡す限りに本が散乱していた。なんでも、私を買った御主人様は学者なのでそうだ。それを聞いて、彼の意図は察することができた。学者と言えば、農家の末っ子がする、奴隷以外で最も下等な役職の一つだ。ヒヨワな末っ子は、日々食事をむさぼるだけで何もしない。だから蔑まれる。よしんば地主や有力家庭専属の学者になれたとしても、先の戦闘でオークから街を守ることでできなかった彼らは、『能無し』扱いを受けている。オークからも知識人は逆逆の芽として疎まれる。誰からも好かれない。子孫を残すことなく生涯独身が当然の役職。私の御主人様も、その一人になるはずだった。

「やあ。もう朝か」

*

彼は机で執筆をしていたその手を止め、こちらを向く。体はあまり丈夫そうではない、ボサボサ髪の男が、メガネ越しにこちらを見る。これが私の御主人様だ。学者一そのなかでも歴史学者という、『現実を見ない』という点で最も蔑まれるタイプだ。

「……どうした、あまり気分が良くないみたいだけど」
彼が言う。暗い部屋で書物とニラメッコしていた割に目は効くらしい。その聡さで、不機嫌の理由まで推し量ってくれないだろうか、と思ったところで、

「ああ、市場の日か……」

彼は察してくれた。

*

彼はいくらか実力のある学者であった。

もともとはこの地を納めていた大地主一家付の御用学者だったそうだが、オークの侵攻を予知できず、全く役に立たなかったらしい。それが故に早々に放逐され、資料と共に長いこと独り暮らしをしていたのだという。

しかし、彼には決定的な短所があった。彼には生活スキルが致命的に無かったのである。本を見れば最低限の料理は作れるらしいが、整理整頓や掃除、そういったものに対してとんと無頓着であり、それでなくても絶望的に下手なのである。その自覚があったのが彼の幸いなところで、彼は、どうやってもこの先一人では健康な生活を送ることはできない。しかし劣等職種の学者には伴侶の候補などあるはずもない。であれば、大地主の雇われだった頃の給金と退職金をはたいて奴隷市で買えば良い……と考えたのである。

聡明なるご主人様が、今日は市場の日だと気付くのに

*

あまり時間はかからなかった。と言うのも、私が「今朝は……」と口走ってしまったからで、いつまでたっても「奴隷市の朝は私の機嫌が悪い」ことを学ばない彼に不機嫌が加速したからである。

彼もまた奴隷市から帰るオークの行列を嫌っている。奴隷制度自体を嫌っている、と言うと私についてを棚に上げていることになるが。まあ、やや異色な人種と言っているから、人間というのは基本的に煩惱にまみれていいるから、金だけで支配者になれるというこの機会に表だった反対をしないことが多い。たまの文句は金欠ゆえで、そういうやつはお金を手に入れたらきつと何人も奴隷を買って侍らすのだろうに。

*

その思考論理を聞いたときに、私は呆れた。

まあ、全体的に論理が破綻している訳ではない。彼の生活スキルは実際破滅的だし、ハウスキーパーを雇って毎月高額な給金を払うよりも、一度買えばそれで済む奴隷を競り落とす方が効率が良い。奴隷制度というシステム自体は唾棄すべき物だとは思わない。その裏に留まらぬ欲望が渦巻いていることが、つまり奴隷制度を取り囲む環境が嫌いなだけだ。ではなぜ私が呆れたか。他でもない彼の第一声、求婚である。メイドを雇えばいいだけなのだ。私とて没落貴族の生まれ、物心ついた時には屋敷も執事もなかったが学を教えてくれた家政婦がたったひとりいた。だからわかる。家政婦でよいのだ。なのに、なぜわざわざ妻なのか。それに対する説明が一切成されていない、それこそが閉口の所以だった。

*

遍く人間に対して恨み言を言ったところで、彼らの耳には入らない。不条理に対して文句だけつけて自分で変えようとしなのはお子様の駄々に過ぎない。変える勇気がないのなら、口を噤むべきだ。

彼の朝食は決まって茶と一枚のパンで簡素だがその代わり夕食を多く食らう。日頃はずっと部屋に籠って地域史や亡国の資料などを纏め上げているようだが、昼夕食と風呂だけ部屋の外に出て来る。最近では手紙のやり取りを誰かとしているようで玄関に誰かからの手紙が来たり、彼に「この手紙を出しておいてくれないかな」と頼まれたりする。が、最低限の字が読める程度の浅学非才の身の上ゆえ、詳しい内容は一切分からなかった。

*

使用人を雇うのでなく伴侶を娶る。

そんな彼の短絡的思考回路には私は男性への侮蔑を見出したが、今となればそれは思い違いで、つまるところ単に彼がどうしようもなくバカなだけだった。実家にも元勤務先にも彼の周りには沢山の使用人がいたが、彼はただ単にそれが大家族にのみ許されると思っていたのである。大家族に生まれ、大家族に仕え、大家族のみが綴る史料を紐解いてきた彼には、庶民の知恵を知る機会が無かったのだ。だからやや強引な手段で妻を得たのだ。

そこに至って私は決意した。この救いようのないお坊っちゃんを、社会に隔離された哀れな男を、救わなければならぬ。社会に戻さなければならぬ。私ならそれが出来る。妻として、この男を矯正せねばならぬのだ、と。

*

彼が仕事を再開したところで、私はキツチンの方向へ戻った。窓からはもうあの忌々しい痴態行列は消え、悲しみを湛えたかのような鳥のか細い啼き声のみが流れ込んできていた。あの女たち——私より少し不幸だったものたち——には、私ですら、もう可哀想だと思っただけになってしまっている。

ふと思ひ立つて玄関に行くと、玄関には三通の手紙が届いていた。差出人は達筆すぎて読めないが、この街の内からのものでないことは察する事ができた。

どうやらうち二通は同一の人物からのようで、ひとつは夫にだったが、もうひとつは「妻」にだった。夫はあの部屋に踏み込まれることをひどく嫌う(朝食だって散々教え込んだのだゆえ、この手紙を渡すのは昼になりそうだったが、とりあえずはもう一つの妻宛という手紙——つまり私にだろう——を開いてみる。

*

それ以来六年、私は夫の持つ社会常識を把握し、持っていないもののいくらかを教え込むことに成功した。その最たる例が「人間は基本、寝たいときではなく夜に寝る」だろう。暗い部屋の中で昼も夜もなく仕事をしている彼は、時間の感覚がすっかりマヒしていたのだ。時計と、彼に毎朝定刻に食事を運ぶことで、いくらか回復させられたが、それでも彼はしばしば徹夜をする。おそろしく今朝もそうだったのだろう。ひよっとしたらこれ以上はよくならないかもしれないが、それでも一度くらい、彼の口から「おやすみなさい」の一言を引き出したいのだ。

*

「貴方が字をどれだけ読めるか分からないから、平易で見易い手紙を心がける。」

僕は君の夫の友人で、君たちの町がまだ人間の支配下だった頃からの知り合いだ。研究分野が似ているんだ。そこちがオーク領になって以来交流がなかったが、最近また連絡を取り始めてね。……手紙を書いたのは他でもない、アイツに妻が出来たと聞いてそれはもう驚いたからだ。僕だつていないのだ。

あまり詳しいことは聞いていないが、大方無理矢理連れてこられたのだろう。アイツはそれくらいしか出来ない人間だ。知っているかもしれないが、君の夫はロクでもない人間だ。おやす「人」は生きていけないだつて、僕にだつて基本迷惑しかかけない。残虐ではないが、厚情でもない。そんな残酷な環境下だ。君の心痛を察する「人」がべきだよ。

もし君がアイツに僻易してゐるならば、僕の所に来るといい。アイツよりはマイルドと思つてか。

*

忌避の対象・学者と、隷属の象徴・奴隸。

そんなこの世の底辺のような我々だが、周囲の人々からは何か後ろ指を刺されるわけではない。彼らは——夫はともかく——私に何も言わない。憐憫の情を向けないし、侮蔑の念も表さない。それは要するに無視である。彼らはもはや、オークの支配に虐げられるよりも、人間の再侵攻で街が焦土になることを恐れる。現状から離れようとしな。たとえそが、邪意の沈む澱の中だったとしても。

びりっ、びりり。ぐしやぐしやつ、ぽいっ。

*

最後まで読むか読まないかのうちに、私はそうした。なぜだか、強くそうしたい、しなければならぬという思いが溢れ出たのだ。手紙の主が言っている彼の像は確かにおおよそ正しい。だから間違っていることに腹が立ったのではない。勝手に私の心痛を察してくる横柄な態度にカチンときたのかもしれない。しまいには『僕の所に来るといい』ときた。お前に妻がいないのは、私の夫のようなささやかな努力と決意をもしなかったからだし、それ以前にお前の性根自体が結婚できない理由を大声で喋っているという事を知らせてやりたかったが、それすらも嫌気がさすほどに、私はこの手紙の主に大きな嫌悪を抱いた。

*

そっだ。ここは停滞した楽園だ。
現状維持という美辞麗句の立ち並ぶ、安全な領域だ。一歩外に出れば、その保証は霧散する。この楽園にいる限りは、安泰でいられる。変わらない暮らしができる。純朴な理想郷ではないが、秩序ある安息の場なのだ。彼らは、自分からは変わろうとしないし、また変わることを恐れる。動けば沼の底に沈むから、沼の中にいるのだ。陸への一歩を踏み出せないのだ。
オークの連中は支配者だが、また同時に管理者だ。叛逆の芽を摘むためならあらゆる手を打つだろう。そう、例えば、民草に現状で満足させることとか。

*

だが、それだけではない気がするのだ。夫の記述の真偽、手紙の主の態度。それらを足したところで、ここまですりたくない。足りないのだ。自分では何とも言えないが、なにかとても大事なものを侮辱された気がするのだ。どうしても許容できない、重大な何かを。

その正体がどうしてもわからずに、昼になってしまつて、夫が昼食のために部屋から出てきた。手紙が来ていたと言つて私宛のアレ以外の二通を渡すと、彼は、お早いな、と呟いて、来たのはこの二通だけだったか、と問うてきた。私はとつさに、うんそれだけ、と返して、ゴミ箱のほうをちらつと見遣つた。

そのあとあの手紙がどうも気になっていた。何が私を怒らせたのかどうもきにかかるのである。そんなうちに日が傾き始めてしまつて風呂の時間になると彼は酷く神妙な顔をして部屋から出てきた。それが何故だかよくわからずに訝しんでいたが、夕食のため鍋に張つた水に自分の、それはそれは神妙な顔が映つたのを見て苦笑した。きつとこれは考えれば考えるほどわからないことなのだろう。

夕食で、彼は突然こんなことを切り出した。

「ねえ、見切りをつける覚悟はあるかい？」

この家、そしてこのぬるま湯にさ」

「どういうこと？」

「昼の手紙、あのうちの一通がね。隣の国の役所が、僕を歴史学者として興味があるみたいなんだ。だからうちで働きませんかという手紙だったんだ。ここからかなり遠いから、もし行くとすれば数日の宿暮らしは避けられないだろうし、何よりオークの管理下にあつてここを出るのはとても大変だ。」

もし嫌だというなら、僕一人で行く」

あまりに突然の、だが思いもよらぬ一言だった。来たのだ。失楽の時が。

ずっと、待つていた——微睡の渦を発つ時を。

言うだけで終わりの日々。ピリオドを打てるのだ。

宿暮らしの苦しさ？

脱走がバレたら？

知らない。

それよりも、心配なのだ、彼が。

いや違う、怖いのだ。この閉じた世界に残されるのが。

……怖いのだ。だから、返す言葉は決まつてる。

「どこへでも添い遂げましょう、

私は貴方の妻なのですから」

あとがき

はじめまして。新入部員の葉桜照月です。高校時代から文芸部にいました。ちなみにそのころのペンネームとは変えました。久しぶりの小説作品でしたが、途中で方向性が迷子になってしまいましたね。……こんなんでも長編書けるのか???

令和元年五月吉日

葉桜照月